

『大陸新報』に見る戦時期上海のユダヤ社会

—— (5) 1940年2～5月 ——

The Jewish Society in wartime Shanghai as reported in *Tairiku Shinpo*
(Part V: February-May 1941)

菅野 賢治 (Kenji KANNO)

1939年1月の創刊以来、『大陸新報』紙上のユダヤ関連記事を時系列で追跡するなかで、われわれは、ユダヤ難民流入の急拡大に対する危機感の表明や、「狡猾きはまる人種」「とぐろを巻く乞食なみの一団」⁽¹⁾といった明らかな差別表現に散発的に遭遇することはあっても、日本本土の公論の場で、すでに久しく溢れんばかりとなっていた政治的——あるいは本稿筆者の用語によれば「擬似理論的」——反ユダヤ主義の持続的な表出を目にすることはなかった。この様相にはっきりとした変化が感じられるのは、第二次大戦開戦を経た1939年9月末、以下のような記事の出現をもつてのことである。

【記事35】昭和14（1939）年9月30日（土）
夕刊2面「共産党系の一部分子／欧州戦乱を機に蠢動／楊樹浦方面を監視／喉元過ぐればのユダヤ難民」

ヒトラー政策の犠牲になつて故国を追放されたドイツ国籍ユダヤ人は国〔数字判読不能〕安住の地を求めて続々〔数字判読不能〕現在すでに一万数千に達し〔中略〕。しかし茲に注目すべきは之等のドイツ系ユダヤ人の間にはナチ政権以前のドイツ共産党の旧党员がかなり多数入りこんで居り彼等の大部分が生活程度の低い難民によつて占められてゐる事実によつても之は十分予想され得る事である、

従つてドイツを追はれたユダヤ人が大量的に東洋へ避難してくる状態を見て「やがて上海は極東赤色化の温床になるに違ひない」と危惧されたものであつた。果然欧州に戦乱が勃発しその風雲が上海にも忽ちピンと反映して在滬ユダヤ人並びにドイツ人が動揺し始めるや、彼等旧ドイツ共産党员は好機到来とばかりに蠢動を開始 得意の宣伝扇動戦術で盛んに反ナチス、反戦熱を煽つてゐる、その動きはまだ組織的なものにまで発展するには至つてゐない模様であるが、楊樹浦方面のユダヤ地区においても共産主義宣伝は秘密裡に進められつゝある形跡があり、若しそのまゝ放任してをけば結局将来に大きな禍根を残す恐れがあるので我が関係当局でも彼らの動きに対し特別の注意を払つてゐる【写真は監視される楊樹浦ユダヤ部落の一とき】

ドイツ、オーストリア、チェコなどから上海に流入したユダヤ人のなかに、本国で非法化された共産党の旧党员やマルクス＝レーニン主義の信奉者が少なからず混在していたことは疑いないが、その代表格たるドイツ出身の演劇人アルフレート・ドライフス (Alfred Dreifuß, 1902-93) の回想によれば、上海に居を移したのちも共産主義の旗幟を鮮明にして活動が続けたのは40名ほどの小集団にすぎ

なかったという⁽²⁾。その彼らが、大戦勃発を「好機」ととらえていかなる「蠢動」を開始したと言い得るのか、必ずしも判然としなが、上の記事の特徴づける反共を基調とする反ユダヤ主義が『大陸新報』の紙面にくつきりと姿を表し始めたことと、1939年9月14日、犬塚（当時・新明）きよ子（1909-92）が読売新聞社東亜部特派員として上海に着任し、犬塚惟重・海軍武官府特別調査部長の事実上の私設秘書として活動を開始した⁽³⁾ことのあいだに、密接な連関を見て取ることは可能だ。

少なくとも、翌40年2月、『大陸新報』に「欧州戦争とユダヤ人の動向」と題して四回にわたって連載された記事の主「新明清」が、陰謀論に大きく傾いた犬塚のユダヤ観をそのまま体する新明きよ子の筆名であったと見て、おそらく間違いはないだろう。

【記事36】昭和15（1940）年2月7日（水）朝刊2面「革命の陰に潜む者／欧州戦争とユダヤ人の動向／新明清」

〔前略〕欧州識者の間では「革命の陰にユダヤ人あり」との言が常識となつてゐるが、欧米流の白人優越感からユダヤ人を一種特別の劣等人種扱ひをする国々に成長したユダヤ人の一部が古来の階級制度を憎み、之の転覆に真剣になるのも無理からぬ傾向であらう。〔中略〕打倒ヒトラーのために彼等としても思想、宣伝、経済、外交とあらゆる謀略戦を用ゐたがこの怒濤の如き全体主義の攻勢に対峙しては勝ち目のないことは逸早く自認してゐる。〔中略〕英、仏等の反独国家をして打倒独逸に煽り立てるといふのが、武力をもたぬ彼等の最後の方法である。〔後略〕

連載の第二回（2月8日、朝刊2面）では、イギリス首相チェンバレンが、1937年、周囲の抵抗を押し切ってユダヤ出自のレズリー・

ホア＝ベリシャ（Leslie Hore-Belisha, 1893-1957）を陸相の座にすえておきながら、大戦開始後の40年1月、彼をあっさり解任したのはいかなる裏事情によるものなのか、至極込み入った議論を展開したあと、「新明清」は、第三回の記事で、ようやく上海の現状に言い及ぶ。

【記事37】昭和15（1940）年2月10日（土）朝刊2面「欧州戦争とユダヤ人の動向／【三】／新明清」

〔前略〕扱て、欧州から追放されるユダヤ人の行方は？ 世界唯一の無査証港上海のみが自由に彼等を迎へる地である、楊樹浦には既に一万一千名の避難者が収容されてゐる、元来が東洋民族たる彼等としては気候風土、文化等すべて東洋の地に憧れをもつてゐたゞけに、上海に流入し、日本の力に依つて生命の安全を保護されることに絶大の喜びを示してゐる。その一証左としては避難民中の医師を集めて集団収容所内に診療所を設置して腕に覚えの技術で安住の地を与へてくれた日支人へのお礼心としたいと云つてゐることなどである

このように、日本が中国支配をつうじて間接的にユダヤにもたらしているとされる温情、恩恵は、最終回の記事中でもさかんに強調される。

【記事38】昭和15（1940）年2月11日（日）朝刊2面「欧州戦争とユダヤ人の動向／【完】／新明清」

日本が事変処理といふ大課題に直面してゐる今哀れな彼等に温い救いの手をさし伸べたことは他民族は敵と信じてゐた彼等にとつて驚くべき恩恵であり、日独防共同盟を以て日本も亦、排猶政策国であらうと思つてゐたゞけに身を以て、まづろひ来れば百年の仇敵さへも許し、包容

する日本の真価を体験したのである

避難民に対する日本の温情はまた租界内のユダヤ指導者をも心から感激させてゐる。最近彼等の間に親日知日論が著るしく抬頭して来たのは彼等の従前の誤れる指導方針が是正され、日本の東洋人の東洋再建に協力せんとする一つの現れであろう。その中でも旧臘廿三日から三日間ハルピンで開催された「極東ユダヤ民族大会」(第三回)で左の様な決議をした事実など刮目されてよからう。[中略]この大会は全世界一千六百万人余のユダヤ人中九〇%を占めるアシケナジム系統に依つてなされたもので、この決議を全世界ユダヤ会議、在英ユダヤ会議、アメリカユダヤ会議等に一齐報道しているのであるから、対日指導方針の転換と云ふことも次第に具体化してくるに違ひない、しかも米国ユダヤ人の八〇%はこのアシケナジム系であり、在滬避難民の三〇%がまた米国に血縁関係者もつと云へば、彼等の国際的勢力の拠つて来る所以も推察されやう。

欧州の戦火は無風地の火のやうに近日中には終息しさうもない、よし、平和にならうとも過去のユダヤ人の安住の地が再び手に入ることはむづかしからう。かうした民族的大危機に遭遇して、その指導者等が□□し東洋民族の盟主日本へ衷心からの協力を□はんとしつゝあるのは、亡国のユダヤ民族のために喜ばしい現象である。同時に彼等と接触の機会多き大陸日本人も彼らの心情を理解し、八紘一宇の大民族精神で誘導する責務を有するであらう。[傍点引用者]

ここで第一に注目されるのは、「まつろひ来れば百年の仇敵さへも許し」との一節だ。ほかでもない、共産主義やフリーメーソン思想に幻惑された現代のユダヤを日本側に引きつけて手なずけ、「八紘一宇の大民族精神」を

もって正道に立ち返らせることを指して「まつろわせる」と表現するのが、日本帝国軍内の「ユダヤ専門家」をもって自任する犬塚惟重のユダヤ政策の要諦であつたからだ⁽⁴⁾。その意味でこの四回の連載記事は、犬塚の上海における私設秘書、「新明清」こと新明きよ子が、犬塚の「反」とも「親」とも名状し難いメビウスの輪のようなユダヤ観を、まずはみずから咀嚼し、綱領としてまとめ上げた一文とみなすことができる。

ついでこの記事が、前年の暮れ、安江仙弘・陸軍大佐の主導のもと哈爾濱で開催された第三回「極東ユダヤ人大会」の成果に誇らし気に言い及んでいる部分には、「回教及猶太問題委員会」(1938年4月2日、外務省内に設置)に犬塚とともに名を連ねてきた安江の手柄を、当人の名は伏せながらも上海の日本世論に知らしめようとする意図が感じられる。実際、第三回「極東ユダヤ人大会」を成功裡に終わらせた安江は、1940年1月25日、「回教及猶太問題委員会」幹事会の場で、哈爾濱のユダヤ居住区から日本によるユダヤ人の平等扱いについて謝意を表明させ、同時に、極東における「ユダヤ特別区」の建設について、アメリカのユダヤ団体からも日本政府に要請がなされるよう働きかける工作が完了済みであることを報告している⁽⁵⁾。犬塚もこれに呼応し、同幹事会に提出した「対米国猶太工作ノ諸疑点ニ対スル説明」⁽⁶⁾と題する文書をもって、在支ユダヤ勢力を活用しながら日米関係を優位に運ぶ政策の有効性を訴えた。総じて、ユダヤの側から日本に表されてしかるべき恩義の念を強調し、「米国ユダヤ人の八〇%はこのアシケナジム系であり、在滬避難民の三〇%がまた米国に血縁関係者もつ」事実を梃として、英米両政府に「対日指導方針の転換」——すなわち経済封鎖の緩和と軍事行動の自重——を促す手段にしようとする「新明清」の記事は、当時、犬塚と安江が懸命に日本政府に訴えかけていた「ユダヤ利用論」と完全に平仄を合わせたものとなっ

ている。

*

おそらく犬塚と新明の合作と見て間違いない、この『大陸新報』の連載記事から十日余りを経た1940年2月24日、UP電をつうじ、渡米中のヴィクター・サッスーンによる日本軍国主義批判の一報が飛び込んで来る。

Japanese May Turn Against Army

Sir Victor Sassoon Gives Views in Talk in New York; Nation Sick of China War

New York, Feb. 24.

With Japan's internal economy crumbling daily and the people already showing disapproval of the army's policies, Sir Victor Sassoon, Shanghai's leading financier today predicted that Japanese people would soon revolt against the military rule.

The Japanese people were becoming throughly [sic] sick with the army's attempt to conquer China and they "will turn against the army," he declared.

All of Japan's internal economy was crumbling and the day was approaching when Japan would seek any peace consistent with "saved face," he predicted.

Russia the Real Enemy

He asserted that Japan would eventually realize that its real enemy was Russia and not China. Russia, he added, would prove to be Britain's greatest foe instead of Germany.

The Japanese mercantile class, he continued, fears the United States will adopt even a stronger policy than enforced at present. He pointed out that the army was running Manchoukou

and this factor was causing displeasure in Japan.

"Dissatisfaction in Japan is heightened by the belief that much that is supposed to go to the army is sticking to the fingers of the higher-ups of the army," Sir Victor alleged.

"The Japanese army in the south and up the Yangtze knows that it cannot win... and it wants to go home."

He emphasized that the United States was holding Japan in the hollow of its hand at present because America has command over the raw materials that Japan must have.

Sir Victor also told the press that Britain was within its right to search United States ships and mails to prevent money and foodstuffs from reaching Germany — United Press. ⁽⁷⁾

すでに見たとおり、ヴィクター・サッスーンは前年1939年2月にも、ヨーロッパからアメリカと日本を経由して上海に帰還する旅の先々で、新聞記者らを前に日中戦争の行く末を占い、「たとえ日本が対中戦で勝利を収めたとしても、たちまち経済的に行き詰ってしまうであろうし、英米仏が足並みを揃えて対日禁輸を行なうだけで、すぐさま中国からの撤退を余儀なくされるであろう」といった発言を繰り返していた⁽⁸⁾。

サッスーン家の年代記の著者スタンレー・ジャクソンによれば、ヴィクターみずから、こうした日本軍国主義に対する挑発的言辞を楽しんでいた節があるという。たとえば1939年7月13日、上海から香港への出張に東京経由の空路を用いた彼は、羽田空港のパスポート検査官に、日英関係を故意に悪化に向かわせている日本政府を糾弾する言辞を浴びせかけた。何事かと詰めかけて来た空港職員たちに対しても、彼は、もしも日本がこのまま上

海共同租界での通商環境を困難なものにしていくならば、彼ならびに彼の同業者たちは、資産の一切合財を上海から香港に移転することも辞さない、と告げた。その上で、飛行機乗り換えの数時間を利用して東京市内にショッピングに出かけた彼は、日本の官憲にびたりと尾行され、要監視者扱いされることをむしろ愉快がっていた、というのだ⁽⁹⁾。

いまや上海におけるユダヤ政策を一手に取り仕切る立場にあった犬塚にとって、この口性無いヴィクター・サッスーンは、まさに「目の上の癭瘤」的存在であったろう。1939年7月7日付で、安江、犬塚、ならびに上海領事・石黒四郎がまとめた「上海ニ於ケル猶太関係調査合同報告」には以下のように読める。

「サッスーン」ハ先般米国ヨリ帰滬後日本人トノ接触大ニ頻繁トナリ殊ニ最近ハ「サッスーン」ニ対スル啓蒙工作成功セル為「サッスーン」ノ反日意識ハ次第ニ緩和サレ少クトモ日本ヲ理解シ精神的接近ヲナシ来レルモノト思料セラル[中略]即チ彼ヲシテ中立的立場ヲ保持セシムル可能性充分ナリト思料ス⁽¹⁰⁾

しかし、イギリスに育ってケンブリッジ大学トリニティ・カレッジに学び、イギリス陸軍航空隊の兵士として第一次大戦に従軍した経歴も持つヴィクター・サッスーンが、第二次大戦の開戦とともに愛国、憂国の情を募らせ、反独、反枢軸から反日の姿勢に傾斜するのは当然の成り行きであった。1940年2月、ふたたびアメリカを訪れる機会を得た彼は、ニューヨークの地で、哈爾濱のユダヤ会衆から彼に宛てられた電文を公の場で読み上げたが、それは、前年末の第三回「極東ユダヤ人大会」の宣言とはまったく裏腹に、満州の日本軍政当局による暴力的な待遇に抗議する内容であった。さらにニューヨークのあるラジオ番組に出演した際に彼が発した言葉がUP電を介して一斉に世界に配信され、上掲の新

聞報道となったものである。ジャクソンによれば、この時、上海へ帰るサッスーンが空路で立ち寄ることとなっていた日本では、空港に到着次第、彼を逮捕拘禁すべしとの世論も一部に沸騰したが、サッスーンはだからといって帰還のルートを変更するようなことはせず、堂々と日本に立ち寄ってみせたという(結局、羽田空港では何事もなく終わった)⁽¹¹⁾。

この時のサッスーン発言に対し、『大陸新報』紙上、以下のごとく異例の六段抜きで憤怒を爆発させる記事の主も、やはり先述の「新明清」である。

【記事39】昭和15（1940）年2月27日（火）朝刊2面「上海ユダヤの異端者／サー サッスーンの正体」

二十四日ニューヨーク発のサー・ヴィクター・サッスーンの戦時日本談話がノース・チャイナに掲載されている。ひどく認識不足の反日的言辞を弄してゐるのでチャイナ・プレス等は第一面に大見出しをつけて大々的に扱つてゐる。彼は着々進行しつゝある日本の新秩序建設、挙国一致の実状に目を覆ひ、重慶あたりから吹き込まれたらしい軍民離反説を力説してゐるのである。この談話で最も驚愕し、憤慨したのは上海ユダヤの指導階級達である。殊に避難ユダヤ救済委員会議長エリス・ハイム・スピールマン氏等が鳩首協議の結果

「サー・サッスーンはユダヤ人として資格のない人物だが、日本の絶大な同情と恩とに依つて我々の同胞が世界唯一の安住の地を得、将来共に日本に頼り信頼しなければならない今日、かかる忘恩の言辞を黙過しておいては申し訳なし」

といふので直ちに、サッスーンの秘書に抗議を申込み、ニューヨークのサッスーンに宛て同じ意味の電報を打たせたといふ。

日本でいくらかでも上海ユダヤに知識をもっている人々はサー・サツスーンといへば上海ユダヤの代表者と思ひ込み、事変以来彼が各所で発表する反日談をそつくりそのまゝ上海在住ユダヤ人の対日感情だと受取つてゐる傾きが多いが今回の狼狽や抗議電報の事実から推しても、サツスーンは上海ユダヤ人の意見を代表せず、寧ろその意に反して無責任な言辭を吐いては困らせてゐることを端的に表してゐるのだ〔中略〕

ユダヤ民族が心から尊敬し、その指揮下に服するといふ人物は、富豪でもなければ、政治家、学者でもない。五千年來彼等の生命とも糧ともなり、地球上各地に分散しながら民族的団結の中心となつてゐたユダヤ教の戒律を遵守して生活する人物が最も尊敬され崇敬されてゐる。かういふ人物こそあらゆる意味でユダヤ人の指導者と仰がれるのである。この見地からいへば上海ユダヤ人セフアルジム派の長老アブラハム翁はアーロンの敬称をもち、宗教的に異なるアシケナジム派からさへビツク・マンと畏敬されてゐる眞の意味の指導者であらう。實際日本人から見ても温厚篤実、老宗教家と感じられる大人物である。

救済委員会首脳者がサツスーンを怒つたのは今度が最初ではない、かれは救済委員会委員をしてゐたが、二ヶ月程前に改宗ユダヤ人（クリスチヤン）をも委員に加入しようと提案して反対され己れもそのまゝ委員会を辞さねばならぬ羽目となつたのである。この委員会（略称 I・C・C）は國際的にも最も權威のあるものであり、且つ委員には上海一流のユダヤ人が連つてゐるものだがこゝから一種の追放をうけたサツスーンはユダヤ人としての資格を失つたと云つてもよいであらう。元來彼に対するユダヤ人間の批評ではサツ

スーンはホワイト・ジユウであつて、しかもホワイト七割、ジユウ三割で、英国のお先棒担ぎに過ぎない、と云ふ。

〔中略〕

「彼は駄々子だ」と当地の長老格の人々は、このビツク・チャイルドの悪戯が思ひもつかぬ悪影響を及ぼすことに眉をひそめてゐたが、今回のやうに彼等同族の死活問題に絡む日本軍への赤裸々な悪意を公表されてみると「駄々子」ではすまされなくなつてくる。しかも、近來頗る日本信頼心が昂まつてゐるだけに身の置き所もなく驚愕してゐるらしい。或るユダヤ人などはサツスーンは「頭腦が小さくて口ばかり大きい動物で、取り込むばかりだ」と云つてゐる。その空ツポの頭腦から政治的意見を絞り出そうとするので來訪記者の云ひなり放題に其場かぎりの場当たり主義を放言するとか。ユダヤ教を忘れた無信念の生活をしてゐる彼としてさもありなん事であるかく觀ればサツスーンの反日言辭など取るに足らぬ問題ではあるが我々として取り上げるべきは、それに対する上海ユダヤ指導階級がしめした反サツスーンの状態と日本依頼の進歩であらう。この指導階級等は新秩序の建設は日本の手によつてなされ、日本を頼らずしては上海に安居樂聚は出来ないとの真相を如實に認識し、英本国の思惑なども無視して思ひ切つた挙に出たわけである。上海のユダヤ人はかうした人々に依つて指導されてゐるという事實、殊にあらゆる点で同族の敬愛を一身に集めてゐるアブラハム翁が中心となつて事變前までの日本に対する□□不足が時々刻々は正されてゐる新事實は刮目に値するものがある（新明清）＝写真はサツスーン＝

のちに、犬塚きよ子は『ユダヤ問題と日本の工作——海軍・犬塚機関の記録』のなかで、当時のことを次のように振り返っている。

この朝 [1940年2月25日]、犬塚がまだ新聞を読まないうちに、R・アブラハムは電話で、この「サッスーンによる日本批判の」記事の悪影響を恐れ「われわれユダヤ人の手で善後措置を講じます」と言ってきた。彼は午前八時三十分避難ユダヤ人救済委員会議長エリス・ハイム、スピールマン、避難民収容所総監督ワインバーガーを呼び集めて協議の結果、

「われわれユダヤ人に理解と同情をもって、容るる天地なきユダヤ難民収容を許した日本を誹謗するサッスーンの言動を訂正させないと日本の恩恵に対し報恩の道がない、とりあえず委員会の名で抗議を申し込む」

と決し、サッスーンに宛、

「貴下の会見談は誤解を招きつつあり、わが避難民に示された日本の寛大な同情を新聞に発表せられたし」

とニューヨークに打電したと報告を受けたのは午後零時五十分であった。こちらからなんの指示もしないのに自発的に行動した機会を一層有効にするために、犬塚は彼らとの会見を約束した⁽¹²⁾。

こうしたなか、翌々日の『大陸新報』夕刊紙上、サッスーン発言に対する日本側の憤慨を念押しのように強調させたのも、犬塚の指示を受けたきよ子であったと察せられる。

【記事40】昭和15（1940）年2月27日（火）夕刊1面「再び反日言動／奇怪、渡米中のサッスーン」

〔前略〕上海の日本側当局では彼「サッスーン」が上海財界の巨頭であるのみならず上海における二大ユダヤ人団体たる国際避難民委員会及び欧州ユダヤ人避難

民援助委員会の最高役員の地位にある点から、彼の言説を重視し今後の動静に対し嚴重監視を加へることゝなつた〔中略〕日本当局では住宅問題其他各種の政治経済上の問題があるにも拘らずユダヤ難民に同情ある態度を採り、従来可及的便宜を与へて来てゐるのに在上海ユダヤ人各団体の首脳部に参列しているサッスーンが排日侮日的言動を続けるのは不潔極まることだと日本側当局では憤慨してゐる

ここで本連載の前回の稿で採り上げた別の文脈と照らし合わせるならば、ユダヤ難民の日常生活を描くゲルトルト・ヴォルフゾーンの映画「祖国を追はれて」が、この2月、ほぼ完成の段階を迎え、シュトルファーの文芸情報誌『ゲルベ・ポスト』3月3日号で近々の封切りが予告されていたにもかかわらず、結局、日本当局からの「待った」によりお蔵入りを余儀なくされたことにも（そのことを直接的に示す資料の類は未発見ながら）、このサッスーン発言の影響を見ずに済ませることは、きわめて困難である⁽¹³⁾。

きよ子の回想によれば、上の夕刊記事と時を同じくして、犬塚とユダヤ側代表らとの会合が行なわれたという。

約束の二十七日午後四時アブラハム邸での会見はユダヤ側の陳謝、委員会からJ・D・C [アメリカ・ユダヤ合同分配委員会（ジョイント）] に対し「サッスーン談話は誤解を招きつつあり〔中略〕」と打電したとの報告など型通りに進んだが、犬塚は、

「先日、避難民来滬一周年記念祭に際し、工部局と委員会へ感謝決議をしたというが……」

と突っ込んでみた。

いや、あれは非公式の集会……との弁解におしかぶせて、

「たとえ非公式の会でも、選挙問題で

緊張している今日、工部局にだけ感謝しては誤解を招くばかりだ」
と初めて選挙問題を採り上げた。そして、
「その選挙について、英米に有利で、日本に不利になるような忘恩行為は絶対にいたしません」
と（英国籍）アブラハムと（虹口居住避難ユダヤ人）ワインバーガーから言質を取るのに成功した⁽¹⁴⁾。

かくして、きよ子によれば、上司にしてのちの夫、犬塚惟重は、サッスーンの反日発言に慌てふためく上海のユダヤ名士たちから、発言主に対する自発的な抗議と日本側への謝罪を取り付けたのみならず、本連載でも詳述したとおり⁽¹⁵⁾、この年の4月10日、11日両日の投票に向けて熾烈な票取り合戦が繰り広げられていた上海市参事会（工部局）の改選に際し、ユダヤ陣営の協力——少なくとも英米人候補者を利するような投票行動はしないと言質——を取り付けることに成功した、というのである。

その後もしばらく『大陸新報』は、もはや「新明清」の筆名は掲げずとも、明らかにきよ子の筆致が感じられるサッスーン弾劾記事を重ねていく。

**【記事41】昭和15（1940）年2月29日（木）
タ刊1面「反日言辞に憤慨／サッスーン排撃
／在滬ユダヤ人起つ」**

「前略」かねて英国の傀儡と化して非ユダヤ人的態度を採つてゐるサッスーンに反対してゐた在滬ユダヤ人間にはこの問題により愈々サッスーン排撃の声が昂まりつゝあるので、サッスーンが何等かの諒解工作を試みぬ限り上海ユダヤ指導者階級から追放されんとする機運さへかもしてゐる〔中略〕彼は遂に上海の同胞ユダヤ人上下挙つて猛反撃を受けることゝなつたのである

**【記事42】昭和15（1940）年3月10日（日）
タ刊1面「サッスーン反対を表明／アシユケナジ猶太協会の決議」**

〔前略〕在滬会員六千名を有し最も有力な上海アシユケナジ・ユダヤ協会では七日左の如き幹部会議の決議を作成サッスーン反対を明にした

決議 新聞に発表せられたる「サー・ヴィクター・サッスーン」の米国記者に与へたる会見談を知悉し在当地猶太人の指導機関たる上海「アシユケナジ」猶太協会幹部会は「サー・ヴィクター・サッスーン」に依りて表明せられたりと称する見解に対し激昂を表せざるを得ず上海「アシユケナジ」猶太人協会は在哈爾濱極東猶太民族協議会の權威を認識し日本政府に対し同政府が一切の偏見を介入せずして人道的に我等を待遇したるを感謝する（以下略）

＊

ここでは、同じ出来事の経緯を「アメリカ・ユダヤ合同分配委員会（ジョイント）」（以下JDC）のニューヨーク本部に保存されている一次資料にもとづき、ユダヤ難民支援者たちの視点から再構成することも可能だ。

まず、犬塚とユダヤ組織の代表らの会合が開かれた2月27日（ニューヨーク時間26日）、スパーマンとエリス・ハイムの連名で、JDCニューヨーク本部に以下の電信が打たれた。

ヴィクター・サッスーン卿のユナイテッド・プレスへの談話報道が深刻な対立を醸している。われらが難民たちに対する日本側の寛大な意向につきプレスに情報提供をお願いする⁽¹⁶⁾

同日、スパーマンはJDC書記に手紙を認め、同じ旨を繰り返した。

ヴィクター・サッスーン卿の談話が不正確に報道されてしまったのか否か、われわれは知る手段を持ちませんが、ただ、アメリカの報道機関に対し、日本当局がわれわれの難民たちにほどこしてきた寛大な措置について情報提供するよう、貴方に求めることがわれわれの責務と考えます。日本当局との交渉をつうじて、われわれが目にしてきた礼節には瞠目すべきものがあります。彼らは、虹口に住む一万五百人の難民たちの生活をより快適なものにすべく、あらゆる手段でわれわれを支援してきました。よって、報道されているヴィクター・サッスーン卿の談話が、これまでわれわれが日本当局とのあいだに保ってきた良好な関係を損ねかねないものであることは、われわれにとり、懸念とまでは言わずとも、大いなる遺憾の種となっています⁽¹⁷⁾。

2月29日、スペールマンがJDCヨーロッパ執行部議長モリス・トロウパーに宛てた手紙からは、前日28日、スペールマンとハイムが日本当局から受けた処遇も明らかとなる。

ヴィクター・サッスーン卿のニューヨークでの口舌が、当地のわれわれにおびただしい不都合をもたらしております。

昨日、日本総領事は、ハイム氏と私に対し、日本の新聞特派員、「同盟」代表、海軍当局の代表らからなる会合への出席を求めました。

この件につき、「同盟」が各紙に配信した記事をここに同封いたします。

私は、貴方ならびにニューヨーク〔のJDC本部〕が、この27日の手紙に記したわれわれの要望、すなわち政府当局や新聞関係者に対し、日本がわれわれのために行なってきたことを現地のわれわれがいかに高く評価しているか、あらゆる機

会をとらえて語って欲しい、という点につき、行動を起こしてくださるものと固く信じております⁽¹⁸⁾。

のちの犬塚きよ子による『ユダヤ問題と日本の工作』によれば、この記者会見はブロードウェイ・マンション一階のホールにて、日本人新聞記者三十名ほどを集めて行なわれ、その場でスペールマンとハイムは以下のような声明文を読み上げたという。

我々ユダヤ人が上海に安住しうるに至りしは日本の寛大なる同情によるものであり、難民救済への精神的支援に感謝するものである。特に直接ご尽力下さった犬塚大佐、石黒領事に深甚の謝意を表す。我々は日本の温き庇護の下に上海で更生の生活開拓に努力しているのであって、上海のためになりたしとの意志にて活躍中である⁽¹⁹⁾。

他方、ニューヨークでは、29日、JDC議長ポール・ベアウォルドが書記ハイマンに宛てた覚書のなかで、以下のような対応策を提示していた。

2月27日のスペールマンの電信に関し、昨日、バーグラス⁽²⁰⁾と話し合った。彼によると、ユナイテッド・プレスは上海に非常に優れた特派員を有しているので、その特派員から電信を打たせ、アメリカ人、イギリス人、日本人、中国人からなる市参事会の構成員全員が、上海ならびに日本が占領する租界の一部に住む不幸な難民たちの生活を安泰にすべく最善を尽くしている、という点を強調させてはどうか、ということだった。これをどうすべきか、私にはわからないが、とにかく一両日中にスペールマンに返答せねばなるまい。

この間、ヴィクター・サッスーン卿が

当地に到着して、先日、『ヘラルド』にインタビューを掲載したが、これがまた芳しからぬ内容であった。まずもって、彼は英国の検閲体制を擁護し、ついで日本に敵対的な態度を表明したのだが、これは当然ながら、現在の難民たちの状況に照らして有益とはいえない。この先、私がサッスーン氏に会おうという気になるかどうか、まったく見通せない。ただ、氏の方から私に接触してきたならば、ともかく会うことにしようと思う⁽²¹⁾。

残念ながら、その後、ベアウォルドとサッスーンの会談がニューヨークで行なわれたのか否か、現有のJDC資料からは判明しない。ただ、一兩日中にもスペールマンに返答すべし、というベアウォルドの見解にも反して、この件への対応をめぐるJDC執行部内でも議論が紛糾したと見え、ハイマンの秘書ジョウゼフ・シュウォーツから上海のハイムとスペールマンに宛てて以下のような返信が綴られたのは、ようやく3月8日のことであった。

貴方の要望にお応えできず残念ですが、貴方にも、当方が政治的な結果を招きかねないいかなる見解の相違や論争にも関わることはできない、という点をご理解いただけるものと信じます。ヴィクター・サッスーン卿の発言は、彼自身の立場からなされたものであり、その行為において、彼はいかなる組織も代表しておりません。当方は、事実関係について直接的な知見を手にしておりませんが、貴方は、状況に関する直接の情報を手にしておられます。この状況下、当方の目には、貴方こそ、賢明にして適切な見解を表明すべき立場にあると観ぜられます。逆に、当方から何らかの行動を起こせば、それが不当な介入と解釈されることは必定でありましょう。

ヴィクター・サッスーン卿による個別の発言に関して、以下の点が貴方のご関心に値すると思われまふ。当方が得た情報によりますと、貴方が言及しておられる発言は、たしかにヴィクター・サッスーン卿のプレス会見をもとに活字に起こされたものであったけれども、彼は後日、公式の発言を文書として報道機関に手渡した由。その中で、彼は自身の言葉が誤って引用されていた個所を訂正した、と報じられております⁽²²⁾。

この間の議論の経緯をJDC文書中に辿ることはできないが、本稿の筆者が別の文脈⁽²³⁾で確認するにいたった政治的中立と法令順守というJDCの二大原則が、この時も一貫して重んじられた結果、こうした不介入と当事者主義の結論に行き着いたものと見られる。

*

これをもって、1940年2月末～3月初めのサッスーン反日発言騒動もいったん沙汰止みとなったが、この件をめぐる『大陸新報』の報道、ならびにそれを裏打ちするJDC文書の踏査から、サッスーンの反日発言を「迷惑視」するハイム、スペールマンら、上海ユダヤ難民支援事業を中心的に担う人々が置かれた立場への洞察を深めておきたい。

上海在住の実業家たちが国籍・宗旨の垣根を越えて寄り集まり、ヨーロッパから、やはり国籍・宗旨の別なく上海への流入が見込まれる避難民たちのための組織づくりに動き出したのは、「エヴィアン会議」が不首尾に終わった1938年夏のことである⁽²⁴⁾。当初の呼びかけ人は、ユダヤ人銀行家エードゥアルト・カン（Eduard Kann, 1880-1962）であった。オーストリア＝ハンガリー帝国ミロスラフ（現チェコ）に生まれ、ウィーンの商業アカデミーに学んだカンは、1901年、中国に居を移した。その長い上海居住歴を活かし、中華

民国の財政顧問をつとめる一方、中国の古銭研究の大家としても知られた人物である（のちの1942年、日本軍により逮捕、拘禁されることとなる）。このカンを中心に、イギリス、フランス、オーストリア、チェコスロヴァキア、ハンガリーなどさまざまな国籍を有し、キリスト教、ユダヤ教双方の出自にまたがる27名の実業家が一堂に会し、1938年8月8日付で立ち上げることにしたのが「欧州難民救済国際委員会（International Committee for Granting Relief to European Refugees）」（略称IC）である。その初代総書記にハンガリー出身のパール（ポール）・コモル（Pál (Paul) Komor, 1886-1973）が選出されたことから、一般に「コモル委員会」とも呼ばれる。

福音ルター派に属するパール・コモルの家族⁽²⁵⁾が、当時オーストリア＝ハンガリー帝国ブダペストから東アジアに移住したのは1896年、そして上海に居を定めたのは1898年、彼が十二歳のときであった⁽²⁶⁾。上海のドイツ人学校「上海皇帝ヴィルヘルム学校」を卒業後、貿易業のかたわら社会福祉事業にも乗り出したコモルは、第一次大戦期、シベリアを経由して上海に流れ着く敗残ハンガリー兵たちを手厚く保護する。それが災いして、上海の英国当局から「敵国人」扱いを受け、一時、ドイツへ強制送還の憂き目にも遭った。それにも屈せず、1920年、上海に舞い戻った彼は、今度はハンガリー・ソヴィエト体制を逃れてきた反共ハンガリー人たちのための支援活動を組織する。こうした愛国精神が、王政を復活させた本国ハンガリーから評価され、1930年代、彼は在上海ハンガリー名誉総領事に任命された。

のちにスペールマンがJDCパリ事務所のトロウパーに報告したところによれば、1938年の夏、コモルは、上海における「難民問題の心であり魂」であった。そして、そこには第一次大戦期に「敵国人」として扱われた自身の苦い体験も関係していたと見られる。ただ、スペールマンによると、コモルはICの運営

において当初からきわめて独善的で、他の委員たちの意見を徴さないまま、常に自身の見解を既定方針として押しつけようとする欠点があった。こうしてIC発足まもなく、コモルは、かねてより昵懇の間柄だったヴィクター・サッスーンだけを除き、委員のほぼ全員と仲違いしてしまう。そして、ICからの脱退を早々に決断したスペールマンを中心とし、同じヨーロッパからの避難民でもユダヤ出自の人々に特化した別組織「上海欧州ユダヤ難民救援委員会（Committee for the Assistance of European Jewish Refugees in Shanghai）」（略称CFA）の構築が急がれるようになったというのが、少なくとも、のちにスペールマンが描き出している事の経緯である。

ミヒール・スペールマン（下写真）自身は、1877年、アムステルダムにユダヤ出自をもって生まれ、1897年、上海にやって来たオランダ人実業家である。ゴム農園の経営で成功を収め、1906～09年には露亜銀行の上海支店長に抜擢された。パリに生まれ、1902年、インドシナ銀行の上海支店に赴任してきたフランス人ルネ・ウジェーヌ・ファノ（René



Michiel (Michel) Speelman (1877-?)
出典Ezekiel, S. (compiled), *Leaders of Commerce, Industry and Th ought in China*, Shanghai, Geo T. Lloyd, 1924.

Eugène Fano, 1878-1937) と早くから友情で結ばれ、1910年代はファノとともにフランスで過ごすことも多かったようだ(その間、フランス国籍を取得したものと見られ、上海ではフランス租界の参事会員にも選出されている)。親友にして共同事業者のファノは、1912年、「国際貯蓄協会 (ISS)」を立ち上げ、1920年代、東アジア、東南アジア一帯で大成功を収める(その余剰資金を運用して上海にアール・デコの美術を根づかせることにも寄与)。1937年、ファノがパリで死去すると、スパーマンがISSの事実上の後継者となった。

JDC文書中、スパーマンの名は、1938年10月28日、新組織CFAがJDCニューヨーク本部のハイマンに宛てた手紙のなかに「名誉出納長」として登場する。この時点で委員会の議長としてフランス人のアンリ・ジャンスビュルジェ (Henri Gensburger, 1869-1956) の名が掲げられているが、その後、何らかの事情でジャンスビュルジェが退き、代わって英国籍ミズラヒ系の実業家エリス・ハイム (Ellis Hayim, 1894-1977) が議長に就任したものと見られる。

このように、ヨーロッパから上海へ流入した難民たちのための支援体制の成立事情を整理した上で、犬塚きよ子の回想のみならず、一般の研究書中でも頻繁に踏襲されている一つの誤解を解いておかねばならない。たとえば、1940年2月27日の『大陸新報』【記事40】において、おそらくきよ子と見られる書き手は――

上海の日本側当局では彼 [サッスーン] が上海財界の巨頭であるのみならず上海における二大ユダヤ人団体たる国際避難民委員会及び欧州ユダヤ人避難民援助委員会の最高役員の地位にある点から、彼の言説を重視し今後の動静に対し嚴重監視を加へることゝなつた [傍点は引用者による]

と述べるが、上記「欧州難民救済国際委員会 (IC)」に相当すると見て間違いない文中の「国際避難民委員会」は必ずしも「ユダヤ人団体」ではなく、国籍・宗旨の別なく上海に流入した全避難民たちのための組織である。

また2月27日、六段抜きの【記事39】では、「新明清」がヴィクター・サッスーンの「ユダヤ性」がまがい物であったことを論って次のように述べていた。

救済委員会首脳者がサッスーンを怒つたのは今度が最初ではない、かれは救済委員会委員をしてゐたが、二ヶ月程前に改宗ユダヤ人 (クリスチヤン) をも委員に加入しようと提案して反対され己れもそのまゝ委員会を辞さねばならぬ羽目となつたのである。この委員会 (略称I・C・C) は国際的にも最も権威のあるものであり、且つ委員には上海一流のユダヤ人が連つてゐるものだがこゝから一種の追放をうけたサッスーンはユダヤ人としての資格を失つたと云つてもよいであらう。元来彼に対するユダヤ人間の批評ではサッスーンはホワイト・ジユウであつて、しかもホワイト七割、ジユウ三割で、英國のお先棒担ぎに過ぎない、と云ふ。

文中、「略称I・C・C」は「略称I・C」の誤記であろう。確かに同委員会には「上海一流のユダヤ人」が多く名を連ねており、実際にその支援を受けるヨーロッパ難民の大きな部分はユダヤ出自であつたに違いないが、委員たる資格が「ユダヤ人」に限定されていたわけではない(その発起人にして中心人物のコモルが福音ルター派の出であつたように)。よつて、仮にヴィクター・サッスーンが新しい委員としてユダヤ出自のキリスト教徒二名を加えようと提案したとしても、それは委員会の趣旨や原則に背馳するものではなく、その提案が退けられた理由は候補者の出自や宗旨以外のところにあつたと見るべきだ(翻つ

て、仮にICが「ユダヤ人団体」であったならば、その委員としてキリスト教への改宗者が推薦されること自体、そもそもあり得ない事態である)。同時に、たとえヴィクター・サッスーンが同委員会のなかで四面楚歌となり、委員の座を辞さねばならなかったとしても、それによって「ユダヤ人としての資格を失った」ことには豪もならないはずなのである。

この意味で、新明きよ子、ならびにその背後で彼女に記事を書かせていたとおぼしき犬塚惟重も、ICの由来と存在意義を当初から完全に見間違えていた可能性が高い。この指摘から翻って、今日の日で歴史を振り返るわれわれ自身、当時、上海に避難の地を見出そうとしたヨーロッパ人は確かに圧倒的にユダヤ「系」でありながら、完全なる「非」ユダヤ人も少数派ながら存在した事実を思いを致す契機にすべきなのだろう。

そして、この誤解を払拭した上で、いま一つの純然たる「ユダヤ人団体」であるCFAの立場から、今次のヴィクター・サッスーンによる反日発言への対応を迫られたハイムとスペールマンの真意を推し量ってみる必要があるのだ。

上に見たとおり、1938年、ユダヤ＝非ユダヤ合同のICが発足してほどなく、コモルが、ヴィクター・サッスーンを除く委員のほぼ全員と仲違いし、その結果、スペールマンを中心とし、ユダヤに特化したCFAが発足したのだとすると、スペールマンにとってヴィクター・サッスーンとは、「断絶・敵対」ならずとも明らかに「分離・独立」の関係にある別組織の重鎮である。そのヴィクター・サッスーンによる外遊先での饒舌ないし放言により、みずから率いるユダヤ難民支援事業が悪影響を被ることは、理に合わない、とんだ「とばっちり」と感ぜられたに違いない。『大陸新報』の新明きよ子の筆によるものと思われる一連の記事が、今回の反日発言をもって、本来、親日的であった上海のユダヤ名士たち

の集いからヴィクター・サッスーンが決定的に「つまはじき」されるにいたった、という筋書きを成立させようとするのに対して、スペールマン、その他、コモルのICへの反感からCFAの発足に動いた人々の目から見ると、その種の「つまはじき」は、すでに今回の騒擾以前に完遂していたと考えられるのだ。

翻って1940年2月末、ニューヨークにあって、スペールマンからみずからの発言について抗議の電信ないし手紙（これに相当する文書は未発見ながら）を受け取ったヴィクター・サッスーンの心境はいかなるものであっただろう。

上海ユダヤ難民を扱う多くの史誌で確認されているように、ヴィクター・サッスーンは、他の二大ユダヤ財閥たるカドゥーリー家、ハルドゥーン家と並んで、ヨーロッパから上海に流れ込む難民たちの福利のため、あらゆる物的支援を惜しまなかった人物である（たとえば、蘇州河沿いの一等地に所有する「エンバークメント・ビル」の一部を難民受け入れのために無償供与するなど）。この時も、みずからの発言によって難民の受け入れ事業、支援事業に支障や混乱を来たすことは、彼の本意ではなかったはずである。

ただ——この点に関してヴィクター・サッスーン本人の言葉が一切残されていないため、断定にはなお慎重であるべきだが——、彼が主にユダヤ＝非ユダヤ合同のIC（コモル主導）に関わり（上述のとおり、ある時点でそこからの辞退を余儀なくされたとしても）、ユダヤ専門のCFA（スペールマン主導）には直接関わろうとした形跡が見られないことから推して、彼自身、ヨーロッパ情勢の悪化にともなう移民・難民の上海流入について、ユダヤ／非ユダヤの区分をもって臨むことの無意味さを感じ取っていた可能性がある。確かにサッスーンは英国籍ミズラヒ・ユダヤ出自の大財閥であるが、今次の大戦にともなう困窮者のための慈善活動においては、「ユダ

ヤ人」よりも「英国人」の篤志家として世から評価されたい、と考えていたのではなかったか。とすれば、彼の側でもまた、自身の反日発言をもっぱらユダヤ出自に結びつけて解釈されることは、理に合わない、とんだ「とばっちり」と感じられていた可能性があるのだ。

スタンレー・ジャクソンによるサッスーン家年代記には、具体的な日付や状況は不明ながら以下のようなエピソードも収録されている。ある時、上海の日本軍将校たちの招待による重苦しい雰囲気のある宴会の最後で、ある将校から「あなたは、なぜそんなに反日的なのですか」と問い詰められたヴィクター・サッスーンは、新しい葉巻に火をともし、しばし間を置いてから、「まったく反日的などではありません。単に親サッスーン的にして、非常に親英的なだけです」と答えたというのだ⁽²⁹⁾。

この問答の本髄は、むしろ、日本人将校（犬塚大佐であった可能性も高い）による問いの立て方にある。サッスーンが英国人である以上、とくに中国での利権をめぐる鋭い対立関係に入った日本に対して負の感情を抱くことはなんら不自然ではないにもかかわらず、この日本人将校は、「あなたがユダヤ人であり、そして上海のユダヤ難民たちが日本当局からこれだけの好待遇を受けているにもかかわらず」という従位節を暗黙の前提としながら、この問いを発しているのだ。むろんジャクソンによる問答の引用が、その時その場の字句通りであったとの保証はないが、「ユダヤ」の語を言外に漂わせながら発せられた「それなのに、なぜ」という問いに対し、問う側の術中に嵌りたくなければ、その「ユダヤ」の語を度外視し、「サッスーン家」「英国」という自己同一性のみをもって応じるにしくはない。その意味で、先の「新明清」の記事中、「サッスーンはホワイト・ジユウであつて、しかもホワイト七割、ジユウ三割で、英国のお先棒担ぎに過ぎない」という評言は、辛辣にして悪意に満ちているようでありながら、

実のところヴィクター・サッスーンの心にそのまま適うものであったかもしれず、「『ジユウ三割』どころか、むしろ『一割』と言っていて差し支えないところだ」とさえ、皮肉の笑みとともに受け入れられたかもしれないのだ。

＊

『大陸新報』上、ヴィクター・サッスーンによる反日発言の次に「ユダヤ」が話題とされるのは、やはりサッスーンが率いる上海の不動産会社が、間違いなく5月10日、ドイツによるベネルクス三国侵攻開始への抗議の一環として採ったと見られる上海在住ドイツ人に対する報復措置である。

【記事43】 昭和15（1940）年5月16日（木）朝刊7面「家主と店子騒動／サッスーン会社が独商人に／突如立退きを要求」

フランス租界では去年同租界に居住してゐたナチス黨員に退去を命じたのを皮切りにナチス黨員に対する圧迫を加重して来たが更に最近ドイツを追はれた在上海ユダヤ人が反ナチスの氣勢をあげつつある事が注目される、この一例として英国に籍を有するユダヤ財閥サッスーン会社は突如共同租界江西路福州路角に所有してゐるハミルトンハウスに居住する独人機械商ビエンケ、薬種商キオウセ、弁護士ミューラーの三名に五月三十一日までに立退くべしといふ強硬な立退きを要求した〔中略〕

同ハミルトンハウスには反ナチス系独人が多数居住してゐるにも拘らず、その独人には退去を要求してゐない所を見ると、英国側のナチス圧迫の反映か、ユダヤ人のナチスに対する報復行為である事は云ふまでもなく明らかである

本稿の筆者は、戦時期上海に関する調査を

つうじ、1939年、第二次大戦の開戦にともない、フランス当局がフランス租界に住むナチ党員に退去を命じたり、1940年5月、ドイツの西方進撃開始をうけて、サッスーンが共同租界内に所有する不動産から一部のドイツ人借家人を放逐したりした事実を裏づける資料にいま遭遇していない。

むしろ、アストリート・フライアイゼンの周到な一次資料踏査からは、上の『大陸新報』で報じられているようなドイツ人排斥の動きとは相反する要素しか浮かび上がってこない。たとえば1939年9月7日、在上海ドイツ総領事マルティン・フィシャーがベルリンの本省に宛てた報告電によれば、彼のもとにフランス総領事じきじきに通達があり、フランス租界は中立地帯であって、英仏＝独間の開戦によりドイツ籍の居住者が不利益を被ることはあり得ない、と告げられたり、また、英米が主導する共同租界の市参事会からも、書記長の名で、租界当局は交戦国出身の居住者の保護にも平等に取り組む姿勢である、との確約が取り付けられたりしたという⁽³⁰⁾。同年12月9日、やはりフィシャーから本省への電報では、上海の新聞紙上、広告の文言として「英国、仏国、米国人に限る」という、暗にドイツ人の借家人や求人応募者を除外しようとする傾向が目立ち始めたことが報告されているが⁽³¹⁾、フランス租界から、あるいは共同租界の特定の不動産物件から、ドイツ籍の居住者がナチスとの関係を理由として退去を命じられる、という事例への言及はとくに見当たらない。

ともあれ、上に『大陸新報』が報じているように（この間もサッスーン関連の取材に当たっていたのは一貫して新明きよ子であったと見られる）、1940年5月、サッスーンの不動産会社がナチ党員の借家人を放逐したというのが仮に事実だったとしても、それを「最近ドイツを追はれた在上海ユダヤ人が反ナチスの氣勢をあげつつ」ある兆候ととらえることは、やはり「サッスーン即ち上海ユダヤの

領袖」という固定観念に由来する見間違いないし穿ち過ぎであったと見るべきだろう。上述のように、スペールマンが主導する「ユダヤ」に特化した難民支援事業に対してヴィクター・サッスーンが保っていた一定の距離を考慮に入れるならば、自分たちを祖国から放逐したナチス・ドイツへの怨嗟から、上海のドイツ・ユダヤ難民たちが「ハミルトンハウス」に住むナチ党員のドイツ人を退去させるよう、家主たるサッスーンに迫り、サッスーンもまた、彼らの怨嗟に共感してその種の「報復措置」を取った、という筋書きには無理強い感が否めない。もしもこの時、誰かに「あなたは、なぜそんなに反独、反ナチなのですか」と問われたなら、ヴィクター・サッスーンは、やはり「ユダヤ」の語をあえて回避し、「単に親英的だからです」と応じて済ませたかもしれないのだ。

＊

上海ユダヤ居住地の歴史においては、1940年6月10日のイタリア参戦が時代を画する境目の一つとなっている。ほかでもない、それまでイタリアの港を出て、地中海、スエズ運河、インド洋を渡る南回りで到来していたヨーロッパの移民・難民たちが、その航路を断たれ、以後、東プロイセン、メーメル、リトアニア、ソ連、満州を経由する陸路シベリア・ルートを取るようになるからだ。シベリア鉄道をチタで下車し、満州里から哈爾濱、奉天を経て大連から船で上海を目指す人々のみならず、朝鮮半島を縦断し、釜山から関釜連絡船で下関に上陸したり、さらには満州国を通過せずにウラジオストクにいたり、欧亜連絡船で敦賀に上陸して、最終的には神戸ないし横浜から南北アメリカを目指す人々の数が急増し始める事態を前に、当然、本国日本の関係当局も神経を尖らせ始める。

この転換点が上海の『大陸新報』上でいかに捉えられているか、継続して綿密な読解と

分析を行なっていかなければならない。

＊本研究はJSPS科研費、平成29～令和2年、基盤研究（C）（1）課題番号17K02041、平成30～令和4年、国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））課題番号18KK0031の助成を受けた。

註

（1）菅野賢治「『大陸新報』に見る戦時期上海のユダヤ社会—（1）1939年1～4月」、『東京理科大学紀要（教養編）』第51号、2019年3月、227頁。

（2）Alfred Dreifuß, *Ensemblespiel des Lebens. Erinnerungen eines Theatermannes*, Berlin, Buchverlag Der Morgen, 1985, p.201.

（3）犬塚きよ子『ユダヤ問題と日本の工作——海軍・犬塚機関の記録』、日本工業新聞社、1982年、99-100頁。

（4）犬塚惟重による「まつろう」「まつろわせる」という動詞の用例は、犬塚きよ子、前掲書、75, 83-84, 122, 324頁に繰り返し確認される。

（5）阪東宏『日本のユダヤ人政策1931-1945——外交資料館文書「ユダヤ人問題」から』、未来社、2002年、130-131頁。

（6）アジア歴史資料センター「民族問題関係雑件 猶太人問題」第九卷、0056-0077.

（7）*North China Daily News*, February 25, 1940. JDCニューヨーク本部古文書Folder 459, NY_AR3344_Count_07_00809.

（8）菅野、前掲論文、222頁。

（9）Stanley Jackson, *The Sassoons. Portrait of a Dynasty*, London, William Heineman, 196, p.254.

（10）アジア歴史資料センター「民族問題関係雑件 猶太人問題」第十三卷、0034.

（11）Jackson, *idem*.

（12）犬塚きよ子、前掲書、233-234頁。

（13）菅野賢治「『大陸新報』に見る戦時期上海のユダヤ社会—（4）幻の映画「祖国を追はれて」をめぐる」、『東京理科大学紀要（教養編）』第54号、2022年3月、70頁。

（14）犬塚きよ子、前掲書、236-237頁。

（15）菅野賢治「『大陸新報』に見る戦時期上海のユダヤ社会—（3）1939年9月～1940年2月」、『東京理科大学紀要（教養編）』第53号、2021年3月、157頁以下。

（16）NY_AR3344_Count_07_00704. 以下、NY_ARで始まる記号は、すべてJDCニューヨーク本部所蔵の文書を指す。

（17）NY_AR3344_Count_07_00705.

（18）NY_AR3344_Count_07_00702.

（19）犬塚きよ子、前掲書、326-327頁。

（20）ポーランド出身のアメリカ人銀行家ジェイコブ・バーグラス（Jacob Berglas, 1884-1963）を指すか。

（21）NY_AR3344_Count_07_00700.

（22）NY_AR3344_Count_07_00692.

（23）1940年6月以降、ソ連侵攻をうけて資産凍結されたリトアニアに、現地ポーランド・ユダヤ難民たちへの支援金をアメリカ財務省の許可なく迂回的な手段で送付することに対するJDC首脳部の逡巡について、菅野賢治『「命のヴィザ」言説の虚構——リトアニアのユダヤ難民に何があったのか？』、共和国、2021年、196頁以下を参照。

（24）当時、難民問題に対応しようとした上海外国籍財界人たちの動向について、のちにスパールマンがJDCパリ事務所のトロウパーに経緯の総括の意味を込めて綴った1940年1月12日の手紙を参照。NY_AR3344_Count_07_00794.

（25）従来、コモルに言及するほとんどすべての史誌のなかで、彼にユダヤ出自が割り振られてきたが、コモルの子息への書簡インタビューにもとづくフライアイゼンの記述に従って、宗旨としては福音ルター派に連なる人物と見るのが至当と思われる。Astrid Freyeisen, *Shanghai und die Politik des*

Dritten Reiches, Würzburg, Königshausen und Neumann Verlag, 2000, p.404.

(26) Irene Eber (ed.), *Jewish Refugees in Shanghai 1933-1947: A Selection of Documents*, Göttingen, Vandenhoeck & Ruprecht, 2018, p.257.

(27) *Ibid.*, p.191.

(28) NY_AR3344_Count_06_01202.

(29) Jackson, *op.cit.*, p.256.

(30) Freyeisen, *op.cit.*, p.480.

(31) *Idem.*